



ベトナム人高校生のスタディーツアーで東川レクチャー(7月12日、道の駅・道草館)

今、生き生きと

東川町国際交流員
劉麗麗(リュウ・レイレイ)さん

今年4月から中国人4代目の国際交流員として活躍しています。前任の王佳夢(オウ・カム)さんから引き継いで来日3カ月。東川に関する情報の中国語発信、文書翻訳、中華圏からの来訪者の案内など、多様な仕事にも慣れました。町最大のイベント、国際写真フェスティバルでは、高校生国際交流写真フェスティバルに参加する北京チームのサポートにも当たり、多忙で充実した日々を満喫しているよう。

国際写真フェスティバルを間近に控えた日、「すごく興奮しているんですよ。小さい町がなぜ国際的な大きいイベントするのか不思議です。多分、将来東川町は全世界に知られるようになりますよ」と間もなく迎えることになるフォトフェスタに対する興味を興奮気味に話しました。

勤務しているハルビン理工大学は、学生は毎年1学年3千人以上入学し、事務職員と教師だけで約3千人という規模だといいます。3カ所のキャンパスがあつて、総面積は東川の市街地と同じくらいの広さになるそうです。ハルビン市の人口は約五百万人、周辺の町を加えると千万人ほどの人口を抱える一大都市圏。6月になると急に暑くなり、12月から2月の冬期は、積雪は50センチ程度しかないのですが、昼間はマイナス17℃、マイナス15度、夜間はマイナス20度を下回るそうです。



インターナショナルフェスティバルで(中国の遊びコーナーを担当。6月11日、農村環境改善センター)

「(東川は)そんなに大きな町ではないです。けれど大規模な事業を立派な小学校建てているし、外国人の勉強のための学校



ハルビン理工大学日本語科の2015年卒業生と記念写真(中央が劉さん。長男の墨墨(モウモウ)ちゃん(当時4つ)と一緒に)

もありです。写真文化も何もないところからつくりあげてきたものですよね。だから感心しています」。



ハルビン理工大学日本語科で日本語を教えています。「一クラス20人から24人までとそんなにたくさんではないので、学生一人ひとりの性格も習慣もはつきりと分かっていて、一緒にいる時は楽しいし、生徒たちの成長を見ていると達成感があります。

4年間に少しずつ成長して社会人になる。生徒を見守ってあげて卒業したら友達になるような感じ。

教壇に立つたら先生と生徒だけでなく、授業以外は『おねえちゃん』と呼んでくれる。卒業すると涙こぼれます。この仕事すごく好きです。この仕事から、もともと良く出来るように日本文化、日本の社会、習慣などを学ぼうと思っています」。

中部大学に留学していた時、一度富士山に登ったことがあるそうです。「一番上に着いたら酸素が足りなかった。御来光は見れなかったけれど、雲海がすごくきれいでしたよ。留学生6人で一緒に行ったけれど、雨が降って全身濡れてしまった」とその時の記憶は今も新鮮な思い出。そして東川では、スキー習得に挑戦したいと思っています。

劉麗麗さん(日本語読みでリュウ・レイレイ、中国語でリュウ・リリ) 東川町国際交流員(JETプログラム)。中国・黒竜江省ハルビン(哈爾濱)市出身、34歳。ハルビン理工大学日本語科卒。同大学大学院言語学修士修了。ハルビン理工大学日本語科教師(2009年4月から)。中部大学人文学部留学(2008年3月~2009年1月)。